

コロナ禍前後のアメリカでの サバティカル

三 嶋 恒 平
(慶 應 義 塾 大 学)
(経 済 学 部 准 教 授)



1 はじめに

サバティカルとは何か、その日々はどのようなものか。企業同様、大学もまた少子化やグローバル化など厳しい競争のさなかにあり、40代以上の方々がかつて過ごした「古き良き大学」とは様変わりした。そうした中、サバティカルは大学の研究者にとって最後に残された楽園とでもいうべき制度であるだろう。一方、ワークライフバランスの改善を目的にヤフーやソニーなど日本企業でも取り入れるところも出てくるなど、サバティカルに関する社会の関心は高まりつつあるようにも思われる。

こうしたことを踏まえ、本稿は2019年3月末から2021年2月末までアメリカ東海岸に位置するニュージャージー州立ラトガース大学のビジネススクール (Rutgers Business School ; RBS) に Visiting Researcher (訪問研究員) として滞在した筆者の経験に基づき、サバティカルのひとつの実態を示したい。サバティカル2年目突入前後からは新型コロナウイルス感染症(コロナ)が発生、拡大したこともあり、コロナ禍でのサバティカルのありようにも言及する。大学の研究者の生態一般も他の業界からするとよく分からないかもしれないので、日々の生活を具体的にイメージできるような記述を心がける。なお、本稿は出張ベースでは一部の海外、特に発展途上国での経験はあるものの、先進国に定住し、そこで日常業務を繰り返し行うといった留学、駐在経験はなかった筆者により見聞きしたもの、という位置付けになるだろう。

2 サバティカルの概要と経緯

多くの大学には伝統的にサバティカルという在外研究を支援する制度がある。サバティカルとは5年から10年程度に1回、1年間ほど大学からの給料等を得ながら、講義負担や学内行政を離れ、海外において存分に研究に邁進するという制度を一般には指す。日本の大学教員の多くは教育、学内行政、研究の3つに取り組むことが求められ、研究者といっても、教育や学内行政を優先せざるを得ないことも多い。

サバティカルは疲弊する大学教員を原点としての研究者に立ち戻させ、進化させる機会となる。サバティカルの間は日本の所属大学での講義・ゼミ担当といった教育義務や学内業務からは解放される。滞在先の研究機関に雇用されるわけでもないので、滞在先組織から学部生や院生に向けた講義やゼミを強制的に担当させられることも一般的にはない。サバティカルは学部や大学院への留学と異なり、学位取得を目的としない。それゆえ、強制的に出席しなければならない講義や単位取得のための試験はない。こうしたことから、サバティカル期間中、研究者は文字通り研究者となって、研究のために1日の大半を費やし、そうした日々を数ヶ月から1-2年繰り返すことができる。

大学による違いはあるものの、一般にサバティカル期間中、給料は日本の所属大学から得る一方、滞在先の大学からの金銭授受はない。また、大学によっては準備金のようなまとまった金額が支給される場合もあるが、企業の海外駐在手当に相当する月々に加算される手当はない。その結果、サバティカル中の研究者は企業、特に大企業から派遣された駐在員と異なり、金銭的には厳しい生活環境に置かれることも多く、筆者の暮らし向きはまさしくそうだった。この

金銭を取り巻く状況はデフレが進行した2000年以降、年々厳しくなり、アメリカの諸々の高コストを敬遠して、ヨーロッパを選択せざるを得ないことを見聞きすることも増えた。

サバティカル先は多くの場合、自身の専門分野の研究進化に資する国や研究機関となるが、その選定方法は人による。周りの研究者をみると、元々海外の研究者と共同研究を行っていて、その共同研究者に訪問研究員としての滞在を受け入れてもらい、サバティカル中にさらに共同研究を進めるというケースが多い。

昨今の大学を取り巻く状況の厳しさから、サバティカル制度を採用する大学は少なくなり、あるいは制度としては存在するものの実際には活用できなくなったりするようなことが多くなった。幸い、筆者の属する慶應義塾ではサバティカルは一定程度の在籍年数など最低限のことをクリアすれば利用でき、福澤基金という塾内助成金を通じてサバティカルの機会を得た。

筆者は、サバティカルの目的として、国際経営論に関する研究サーベイの徹底、定性的な研究方法論の刷新の2つを掲げ、この目的達成に向けアメリカでの研究を希望した。というのも、アメリカは、国際経営論の分野において世界最先端であり研究者も集まっているため、多様で先端的な研究とその方法論にアプローチできるからであった。さらにアカデミックのみならず国際経済の中心であり、イノベーションが数多く生じているという点も筆者にとっては魅力的であった。

しかし、筆者はこれまでの研究フィールドが途上国に偏っていたため、アメリカの大学に所属する研究者で、在外研究の受け入れを直接依頼できるほど親しい研究者は知り合いにはいなかった。そのため、同じく慶應義塾大学に所属する井口知栄先生にお願いして、国際経営の分野では泰斗であるJohn Cantwell先生を紹介していただき、そのCantwell先生が同じRBSに属するMarkus Taussig先生を紹介してくださり、Taussig先生が寛容にも受入を快諾してくださったことで、筆者は無事、アメリカのRBSでの在外研究が実現できることになった。

3 サバティカルで得たもの

サバティカルで何を得たのか。筆者の場合、それは研究時間と研究ネットワーク構築の機会であった。筆者のサバティカルでは、毎週水曜日に開催されるRBSの国際経営系教員のグループが開催するランチセミナーへの参加と受入教員が担当する講義（週2コマ程度）への参加のみがルーティン（日課）であり、それ以外の時間は、子育てを除き、研究に充てることができた。筆者はサバティカルにおいてRBSのオフィスに個人研究室をもらえたわけではなかったが、むしろそのおかげで大学キャンパス内に立地した自宅アパートや徒歩数分の大学図書館において研究を行うことができ、朝から晩まで引きこもって書くことができた。このような研究三昧の生活は2008年に大学院博士課程を修了して以来初めてのことであり、おかげで研究のブラッシュアップを図ることができた。いくつも抱えていた原稿の多くを書き上げることもできた。

研究ネットワークの構築については、主に3つのルートがあったように考える。第1は受入教員との関係である。元々共同研究者でも何でもなかったにも関わらず、受入教員であるTaussig先生の人の良さにより、筆者は彼と定期的に研究に関することを議論し、さらには日常のことを相談したり、家族ぐるみで夏のキャンプへ行ったりといった大変有意義な時間を共有することができた。Taussig先生は国際経営論の分野では第一線で活躍しつつある気鋭の研究者であり、そうした第一線の研究者と信頼関係を構築でき、また彼らを取り巻く研究や教育、生活のあれこれを伺いしれたことは何物にも代えがたいことである。

第2は受入機関に所属する研究者とのネットワークである。上述のランチセミナーには常勤スタッフのみならず、外部報告者や非常勤スタッフ、院生など様々な研究者が参加をしていた。筆者がセミナーに参加しているうちに出席者の一人であった高齢の研究者から声をかけられ、次第に研究について色々話し合うようになった。後ほど知ったことであったが、彼は経営戦略論の大家であった。教育負担がない同士の時間に余裕があるからこそその交流であり、対面形式のセミナーだからこそ得られた機会だったように思う。

第3に、アメリカで開催された学会への参加を通じたネットワークである。そのひとつは、

Academy of ManagementやAcademy of International Businessなどアメリカで開催されることの多い、グローバル規模の学会への大会参加である。大会ではトップジャーナルに論文を掲載する研究者のプレゼンにワクワクしたし、彼らの質疑応答で論文には表出しない仮説やアイデアを確認できたことは貴重な学びとなった。さらにこれら大会は1万人前後の参加者が集うため、研究報告のみならず、会場の廊下や休憩室、付近のカフェやレストランなどそこかしこで研究の打ち合わせをする姿があった。筆者もこうした打ち合わせに学会開催中に何度か参加したが、質量とも不十分であったと反省している。そもそもサバティカル中は当該大会で報告せずそうしたインフォーマルな会話の契機を見つけづらかったからであり、メールなどで研究打ち合わせの事前アポをとるという仕込みが不十分だったからであった。

2つ目は、グローバルな学会の地域大会への参加である。日本でトップジャーナルをサーベイしていると、アメリカでの研究は、構成、論証方法ともいずれも標準的であり、洗練されている印象を受ける。しかし、アメリカでの地域部会に出席してみると、報告水準、内容は玉石混交であり、視角や分析枠組みも多様であった。日本の研究者がサーベイ対象とするトップジャーナルの掲載論文はグローバルにみても一握りの高い水準にあるものであり、筆者がサバティカルで垣間見たアメリカの地域学会の動向はボトムアップで練り上がっていくプロセスだったようにも思う。

3つ目はニッチで学際的な学会大会への参加である。アメリカを本拠地とする国際的な学会はディシプリンが確立し、研究スタイルが明確である。しかし筆者は学際研究がマジョリティを占める学問的には少数派の学会の大会にもサバティカル中に参加した。ジャーナルランキングとして必ずしも上位に位置しないものの多様な視角、方法論に基づく、論文投稿先が存在し、その活発な実態を確認できたことは意外な発見であった。

4 コロナ急拡大期のアメリカ

アメリカでも2020年3月以降、急速にコロナの感染が拡大し、それに対する政策が矢継ぎ早に打たれた。筆者が在籍したラトガース大学においても、大学当局が2020年3月10日に大学全体としてのコロナ対応策を示し、講義等全てをリモートに切り替えること、図書館やオフィスなどを立ち入り禁止にすること、大学内の寮生は寮からの退出を2日後の3月12日までに完了させることを一方的に通達した。まさしく非常事態であった。リードタイムのない通達により、キャンパスの寮に在住していた学生が荷物を抱え自動車を連ねて一斉退去する光景は忘れられない。さらに2020年3月21日には在住していたニュージャージー州でのStay at Home（外出禁止）令が発せられた。キャンパスから人が消え、街は静寂に包まれた。

筆者は訪問研究者ということでコロナ禍においても家族向けアパートでの滞在も許された。しかし、この時期、筆者は2020年3月末で有効期限を迎えるアメリカでの滞在許可証を更新する必要に迫られていた。2019年3月にアメリカに入国して以降、アメリカでの事務手続きの緩さを体験する出来事に何度も遭遇していたので、2020年1月からの中国や日本での感染急拡大におののきながら、担当秘書に早めに手続きを進めるよう依頼していた（2019年10月には更新手続きに入ろうとしたが2020年1月になってからで十分だ、と秘書にスケジュールを設定され、手続きの前倒しは叶わなかった）。日本ではクルーズ船での感染拡大が大騒ぎとなっていた2020年2月になっても大学の事務スタッフらと筆者はコロナの危機感を一向に共有できず手続きも進まず、こちらの懇願も「心配し過ぎよ、ノープロブレム」と悪意のない笑顔でスルーされていた。同年2月、東南アジアに出張するRBSの研究者がいて、彼に不要だと断られたものの「マスクは必ず必要になるし現地で購入できないから絶対持っていけ」と押し付けるように渡し、帰国後、非常に感謝されたこともあった。2020年3月になって「コロナは尋常ならざる大変なことだ」とアメリカ人もようやく認識するに至ったときは既にオフィスへの出入り禁止、外出禁止令が出され、筆者の滞在許可証の更新作業も停止した。

コロナは未知で恐怖であったが、不法滞在となることは最も避けなければならないことだった。必死の思いでメールをし、電話でのやり取りを続けたものの、ラトガース大学は全米でも

有数の大規模大学であり、官僚制組織構造であり、滞在許可証の更新は部局横断的であったため、様々な担当者へ連絡し、事情を説明する必要があった。受入教員等からの支援を得ながら、担当秘書が最後には奮闘してくれたことで、リモートでのビザ更新を期限内に何とか間に合わせることができた。なお、2020年4月中旬のニュージャージー州では1日あたりの新規感染者数が3,000人前後、1日あたりの死者数は多いときには360人にも達した。ニュージャージー州の人口は888万人であり日本の全人口の14分の1に過ぎず、この時期のアメリカにおけるコロナの猛威の度合いがわかるだろう。

5 コロナ禍のサバティカル

安穏としたサバティカルの日々はコロナによって次の3つのような変化が生じた。第1に、リアルな人的交流が途絶えたことである。コロナにより大学が閉鎖されたため、上述の3つのルーティンのうち、セミナー参加と講義受講がなくなり、筆者のルーティンは自宅での研究のみになった。また、キャンパス内にあった家族寮では各国からの研究者家族が在住していたことから、コロナ前は家族ぐるみの付き合いがあり互いの部屋を行き来してパーティーを開いたりしていたが、コロナ以降、挨拶すら微妙になってしまった。

第2に、キャンパス内で生活が完結しなくなったことである。アメリカの大学のキャンパスは広大であり、キャンパス内に教室や講堂、食堂のほか、体育館やプール、映画館、小さなスーパー、アイスクリーム屋、スタバなど生活するためのインフラが整っていた。しかし、コロナによりこれら設備の大部分が閉鎖された。無料バスがキャンパス内および最寄り鉄道駅をつなぎ24時間利用でき、コロナ前は1時間に5-6本は走っていたものの、コロナ後は1時間に1本程度となってしまった。通販はAmazonのほかWalmartやTargetも利用できるため日用品の調達は一時の混乱期を除き問題はなかったが、生鮮食品の調達はスーパーマーケットに自身で出向く必要があった。食事はUber Eatsなどのフードデリバリーサービスが利用できたものの、配達料等を含めると1食で20ドルを超えた。Uberはコロナで常時稼働の台数は減ったものの10分程度待てばいつでも利用できたため、自動車を所有していなくてもUberを15分程度利用すれば(20ドル程度)、スーパー等に行くことは可能だった。それゆえ、コロナ前も決して安いわけではなかったが、コロナ以降、生活するためのコストと必要活動、時間が増したというのが筆者の実感である。

第3に、リスクマネジメントの難しさであった。幸い筆者家族は無事に過ごすことができたが、コロナに対する正確な情報がなく、さらに組織的な支援も期待できないなか、コロナに罹患した場合どのように行動すべきか、という点を常に考えていた。しかし、筆者家族は3歳の娘とアメリカで授かった乳飲み子を抱え、妻が入院するケースや私と二人同時に入院するケースを想定しても妥当な解は見つからず、しっかり食べて、寝るという基本的なところに留まっていたのが実情だった。また、コロナによりアジア系への差別が発生したり、治安が悪化したという報道もあったが、筆者はそうしたトラブルに遭遇することはなかった。安全なキャンパス内に住んでいたこと、ニュージャージー州は中国系やインド系の住民が多く筆者が住んでいたエリアもそうしたコミュニティをいくつも抱えていたこと、がその要因だろう。大学寮は大学周辺の貸家に比べて安価ではなかったが、管理の良さ、安全性という点で卓越していた。

6 おわりに

筆者のサバティカルは当初、研究者としてのサバイバルを賭けていたが、2020年3月以降、生活するためのサバイバルの要素が色濃くなった。「大変なときに来てかわいそうに。大統領はトランプだし」とアメリカの友人に言われることもあったが、研究においても、生きていくことにおいても貴重な経験をすることができたことと筆者は考えている。最後に、サバティカルの機会をいただいた慶應義塾大学、サバティカル中に負担が増した経済学部の同僚、RBSを紹介してくださった井口先生、Cantwell先生、受入教員のMarkus、秘書のDawn、色々気にかけてくれた泉隆一郎さん、Jeremyと恵さん、いつも共に過ごした家族に心から謝意を表したい。